



周作人・小河・新村

著者	飯塚 朗
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	8
ページ	45-63
発行年	1975-12-31
その他のタイトル	Chou Tso-Jen : His Small River and Mushanokoji's "New Village"
URL	http://hdl.handle.net/10112/16090

周作人・小河・新村

飯塚朗

一九〇六年、七月の間、魯迅、母の命を奉じて帰国し、婚約中の朱女士（名は安）と結婚。婚後数日にして、大弟周作人とともに日本へ行き、東京本郷区湯島二丁目伏見館に住み、彼らの文芸研究を開始す（曹聚仁『魯迅年譜』）。

周作人の日本留学はこうして始まったことにまちがいはないが、周作人の側からも少し詳しく見ると、この時に同行者があった。同じ紹興出身の邵明之で、北海道札幌へ留学して、鉄道関係の勉強をした男である。一八九七年（明治三〇年）に北海道大学では土木工学科を設置しているから、そこを目ざして行ったものであろう。北海道は日本の少数民族、鬚の蝦夷の密集地で、多雪多熊の地帯である。当時の中国人に知られていたようだが、そこへいく邵明之が丸顔で毛深かったことから、他人に綽名をつけることの好きな魯迅が、邵明之のことを「熊爺」と呼んだという。北海道で「熊」のことを「オヤジ」というが、魯迅がそこまで心得てつけたとも思えぬから、これは偶然の一致であろう。ともかくこの邵明之とその友人張午楼

周作人・小河・新村（飯塚）

と一行四人で、便船を待つ間、上海の商人宿へ数日間泊った。この宿で、事件というほどではないが、二つの事が起こっている。中国ではそのころまだ字を書いた紙を大切に作る習慣があった。彼らはそれを迷信として、これを打破すべく、便所でわざわざ新聞紙を使用した。他の泊り客の抗議もあって、宿の方から浙江産の黄色い紙を支給してくれて、一応この問題はケリがついたようだが、当時の中国の世相がうかがわれて面白いし、彼らがまだ年若く血気盛で、日本留学を前にしてどんなに張り切っていたかも見え透く話である。

もう一つは、魯迅と邵明之はすでに斬髪済みであったが、周作人と張午楼がここで弁髪を切ったということである。普通髪を切るとなると、「剃頭匠」で、張午楼はそこでツルツルに頭を剃られたから、日本へゆく船の中でも人にジロジロ見られてきまりわるい思いをしたようだが、周作人は少々高価でも、当時ではめずらしいバリのカンのある理髪屋へ行って、体裁よく刈りこんでいる。あるいは魯迅あたりの入知恵もあったかも知れぬが、旧い中国の型に飲まなかったような、あまりにみつともない姿で日本へ乗りこむな、という、こ

れまた当時の中国留学生の一面を如実に物語っているように思う
 『知堂回想録』(往日本去)。

こうして日本へ来て、まず魯迅とともに本郷区湯島二丁目の伏見館という下宿に住んだのである。日本は明治維新の成功後、西洋文明を速成的に学んだ。日本留学は西欧留学よりも費用は安く、西洋文明を吸収できる。そういう流行に周作人もまた身を任せたとはいえようが、日本へ始めて来て周作人が興味をおぼえたものは、そういう模範的なものではなく、日本独自の生活習慣であった。彼自身の言葉でいえば、その魅力の対象は「自然」と「簡素」であった。明治の末年にはまだたしかにそういう「江戸」的なものが、東京にあったであろう。具体的にいうと、伏見館の主人の妹、乾榮子（いづみこ）である。周作人はこの、女中代りに使われていた、当時十五、六歳の少女の素足に心惹かれたのだった(『知堂回想録』「最初の印象」)。

筆者は戦時中の北京で、北京小姐を日本の料亭に招いたことがあったが、部屋が畳敷きだったので、どうしても上がろうとしない。靴を脱がねばならなかったからだ。たとえ絹のストッキングを穿いていても、男の前で足を見せるといふことが、そんなに大へんなことなのかと、つくづく驚いたことがあったが、逆に周作人は、素足で平気で室内を歩いている日本の若い女性に驚愕し、かつその「赤脚」を讚美せざるをえなかった。

「両足白如霜 不著鴉頭靴」

文人周作人はそこで李白の詩句を連想して、李白の人間性を強調

し、中国の纏足の悪俗を憎んでいるが、「両足白きこと霜の如し」は『浣紗石上女』、「鴉頭の靴を著けず」は『越女詞』のそれぞれ末句であるから、周作人は記憶のみでつづけて書いたものかと思う。しかしさらにつづいて、善美なのはギリシヤのサンダル、閑適なのは日本の下駄、経済的なのは中国南方の草鞋（ワラジマ）で、皮靴などはいちばん愚劣だといっているのは、まさに慧眼といわざるをえない。(『日本之再認識』↓「最初の印象」へ抄録)。

「わたしがはじめて東京へいったのは魯迅と一緒に、われわれの東京での生活は、全く日本式だった。多くの留学生は日本の生活に馴染めず、下宿に住んでもテーブルやイスを用い、ベッドの買えない者は、押入に這い上がって寝る始末、食べるものも熱い飯でなければだめということ、こういう連中をわれわれはいつも嘲笑した。苦しみに堪えられないくらいなら、なにも外国へなど出てくることはないし、そのうえ日本へ来て単に少しばかり技術を学んで帰ったところで、結局上っ面をなでるだけのはなし、生活から体験していかねけりゃあ、日本のことを深く知るなんてできっこないと思ったからである」(『葉堂雜文』「留學的回憶」)。

魯迅もそうだったかも知れぬが、周作人は一そう深くこの日本の生活体験の中に浸っていったと思われる。伏見館に住んでまずやらねばならなかったことに、文芸雑誌「新生」の準備があったが、これは長期工作であって、短期間にできることではなし、やはり魯迅に引き廻される程度のことであつたらう。周作人には当面当然のこ

ととして、日本語の勉強があった。湯島から程近い駿河台の、中華留学生会館の日本語講習班に通ったが、ここで日本語教師菊地勉から、日本語の基礎を身につけた。しかしここは卒業しても資格はなく、進学に不便だったため、一九〇七年の夏に改めて政法大学の特別予科に一年籍をおいて資格をとったわけである。周作人自身は日本語の勉強に勤勉でなかったといっているが、魯迅と一緒の間は何もかも魯迅の庇護の下にあったから、一人で外出するのも稀で、たまたま日本橋の「丸善」へ洋書を買いくらいのものであったであろう。日本留学までに周作人はいくつか西欧の文学を翻訳しているから（著作目録参照）、その延長で、「丸善」の洋書への魅力もいうづける。また日本語の文章に漢字が多かったから、そう日本語の勉強に努力しなくても、「眼学」で読めたようだ。中国語に簡体字ができないうちは、中国語の勉強にそう努力しなくても、「眼学」で読めたのと同じように逆のケースである。しかし魯迅も日本を去り、周作人も羽太信子と結婚したとなると、もう「眼学」だけでは事が済まなくなった。日本文もようやく漢字が制限されてくる。そうした中で、実社会で使う言葉を書物の上から吸収しようとするれば、小説、戯曲に集中すべきだろうが、それは大へん範囲がひろい。そこで「狂言」や「滑稽本」に目をつけた。そして富山房の『袖珍名著文庫』中の芳賀矢一編『狂言二十番』、宮崎三昧編の『落語選』、さらに三教書院の『袖珍文庫』中の『誹風柳多留』が、周作人の好きなテキストになったという。日本の人情風俗に沈潜するきつかけは

周作人・小河・新村（飯塚）

すでにこの時から始まったし、後年『日本狂言選』や『浮世風呂』『浮世床』を訳出したのも、その沈潜の中からの所産である。

雑誌発行の準備の方は、遅々として進行しなかった。メンバーといえはたった四人である。周作人以外には、許季弗（寿裳）と袁文藪であった。魯迅こそいわゆる「仙台事件」を経て、文学運動への決意は十分堅かったろうが、まだ周作人は自分でもいっているように、かつて南京時代（一九〇一）に雑誌「新小説」を読み、梁啓超の『小説と群治の關係を論ず』を読んで文学的影響をうけた程度のこと（魯迅の影響で文学への眼はたしかに開かれていたろうが、新文学運動への意気込みはちがっていたと思う）、それに袁文藪のごときは、日本から英国留学に転じ、消息を絶ってしまったのである。

この「新生」発行プランは、ほとんど魯迅の一人相撲であったといつてよからう。かえってこの時期に周作人は、魯迅の買ったアメリカの Garley 編の『英文学の中の古典神話』やフランスの Taine の『英国文学史』の英訳などから、世界文学へ眼をひらき、自ら駿河台下の中西屋書店で英のアンドル・ラングの『Custom and Myth』や『Myth, Ritual and Religion』を買って、ギリシャ神話に興味をもつ動機となった（『知堂回想録』『籌備雑誌』）。

そのご下宿を東竹町の順天堂病院近くの中越館に移した。引続いて新文学紹介の仕事をするには、資料を買う金が要る。官費の留学費は知れたもので、翻訳でいくらかでも稼がねばならない。この時翻訳したのが、『紅星俠史』『勁草』『匈奴奇士録』『炭画』『黄

『薔薇』などであったが、『紅星佚史』と『匈奴奇士録』のみ原稿が売れて、それで参考書も買え、余分を日用に充てることができた。

(著作目録参照)。その『紅星佚史』の訳が完成したのはまだ伏見館にいたとき(一九〇七年二月)だったが、これは古代ギリシャの物語で、のちのギリシャ文学への傾倒に目を開かせたのは、このアンドルー・ラングに負うところが多いようだ。

商務印書館から二百円の稿料が手に入り、「丸善」へいって、ツルゲーネフ全集が買えた。またデンマークの批評家ゲオルグ・ブランドスの『ポーランド印象記』『ロシア印象記』も購って、ロシア文学への橋渡しにもなった。そして手をつけたのが、アレクセイ・コンスタンチーノビッチ・トルストイの『白銀公爵』である。中越館のがらんとした部屋で、周作人が専ら翻訳、魯迅がそれに修正を加えて、きわめて和気霽々と訳了し、『勁草』と改題して出版しようとしたが、これはすでに先訳があるとのことで失敗に終わった。民国の初年に魯迅がその原稿をもって北京へ出て発表しようとしたようだが、これもうまくいかず、原稿も失われてしまったらしい。

それで次にとりかかったのが、ヨークイ・モールの『匈奴奇士録』なのである。これも中越館で訳業はやったのだが、序文では戊申五月(一九〇八年五月)となっていて、それはすでに西片町へ引越してからの年月になる(『知堂回想録』『翻訳小説上、下』)。

許季葦が高等師範を卒業して、本郷区西片町十番地口の七号にあった、夏目漱石の住んでいた家というのを借りて、そこへ友人たち

を呼んで同居した。魯迅も周作人も彼の招きで、中越館から転居した。一九〇八年四月八日の大雪の日のことである。銭家治とその親戚の朱謀先を加えて同勢は五人、その棲家を「伍舎」と呼んだ。

民報社へいって、章太炎から『説文』の講義を聴いたというのは、この一九〇八年から翌年にかけてのころである。当時章太炎は東京で、同盟会の機関誌「民報」を主宰、国学講習会をやり、神田の大成中学の講堂を借りて定期的に講義をしていた。そこでは聴講生も多かろうということから、日曜日の午前中に民報社で特別に講義してもらえまいかと頼むと、章太炎も快く承知したので、魯迅、周作人のほか、龔未生、錢夏(のちの錢玄同)、朱希祖、朱宗萊ら八人が聴講することになった。民報社は当時小石川区新小川町にあつて、章太炎はそこで極めて興味深く、そのうえ非常に家庭的な雰囲気だ『説文解字』を語ってくれたらしい。当時章太炎が留日学生に与えた影響はきわめて大きいと思うが、周作人もまたギリシャ、日本と並んで、中国本来の学問の造詣(勿論故郷の三味書屋での勉強が基礎になつていようが、周作人自身無益であつたと述べているのを筆者は顔面通りにはうけとらない)と彼の民族思想は、この時から深く養われたとみていいであろう(『知堂回想録』『民報社聴講』)。

「新生」の失敗で萎縮するような魯迅ではなかった。「新生」は形を変えて雑誌「河南」への寄稿と、『域外小説集』として一応実を結んだ。前者は評論を登載した「新生」甲編、後者は翻訳を刊載した「新生」乙編と、周作人は見做している。「河南」は河南留学

同郷会から出ていて、第一期は一九〇七年十二月出版、十期ぐらいつづいた雑誌で、総編集は劉申叔がやっていた。劉申叔といえば、揚州の有名な国学者の家柄、「国粹学報」にも参与して、文章家として名が通っていたが、当時は彼の夫人何震が、当時として破天荒の女性無政府主義雑誌を創刊したことで、ことに評判が高かったという。そういう話はすべて龔未生が、章太炎や蘇曼殊から聞き出してきて、周作人らに伝えたようだ。何震は蘇曼殊の画集なども編集していたし、劉申叔夫妻の家に蘇曼殊も同居していた関係があるので、その噂が蘇曼殊を通して伝わったことも納得がいく。魯迅はその「河南」の第一期に『人間之歴史』を載せているから、その執筆はまだ中越館にいたことになる。「摩羅詩力説」もこの「河南」に載せたものだ。周作人はその「河南」の第三期に『論文学之界説与其意義、併及近時中国論文之失』を載せて、林伝甲の『中国文学史』を批判した（『知堂回想録』『新生甲編』）。

感情的な経緯があつて錢家治と朱謀先が突然「伍舎」を出したので、魯迅、周作人、許季葦の三人は、同じ十番地のへの十九号へ移転した。このとき周作人はクロポトキンの『シベリア紀行』を訳して「民報」に発表したが、この号は発行前に日本政府から発禁をくらつて没収されたのである。発禁だけでなく、当時で百五十円の罰金が科された。民報社も金がなくて困っている事情を知って、龔未生が魯迅のところへ飛んできて相談した。ちょうどそのとき、湖北留學生訳印の『支那経済全書』を扱っていた公金が許季葦の手許にあ

周作人・小河・新村（飯塚）

つたので、その一部を借りて民報社の危機をきりぬけたのだが、この事件はどうも満清政府からの要請もあつたらうし、革命同盟会は成ったにしろ、日本を舞台にまだまだ諸党間の角逐もからんでいたのではないか。ともかくこの事件で魯迅は、孫中山系の同盟会にささか不満を抱いたらしい。ことに孫文はのちに胡漢民らに、フランスで「民報」を復刊させ、その禁止された号から出させたり、章太炎の文章は避けて、その狭量さを示したと、周作人は述べている。「民報」のパリでの復刊は一九一〇年二月で、そのときの編集長は汪精衛である。汪精衛はかつて東京でやはり「民報」編集にたずさわり、ブルジョア革命家としての論陣を張って活躍したが、「民報」が章太炎一色となるのをきらって去っているから、これは汪精衛個人の好悪にかかるものであつたかも知れぬ。この『支那経済全書』というのは、東亜同文会の編集で、中国経済社会の情勢を詳しく調査したものであつたので、湖北の留學生が翻訳出版を計画し、当時の兩湖総督であつた張之洞が賛成して金を出してくれて、許季葦の陳という友人が管轄していたのを、陳の卒業帰国後、許季葦が代理していたのであつた。許季葦はそのとき、罰金を都合してくれただけでなく、魯迅に校正の仕事を与えて、何がしの報酬を出してくれた。その報酬はいくらでもなかつたが、その校正の仕事をやつたおかげで、『支那経済全書』の印刷を引請けていた神田印刷所の人と親密になり、『域外小説集』出版のめどがつくのである（『知堂回想録』『新生乙編』）。

『域外小説集』のスポンサーになってくれたのが、蔣抑卮である。彼は同じ紹興出身の呉服屋さんで、浙江興業銀行の株主でもあった。耳の病気で日本の専門医に看てもらいに来日したのだが、なかなか進歩的な考えをもっていて、魯迅とも話が合い、翻訳集出版の計画を知って、大枚二百円の援助をしてくれた(『知堂回想録』『蔣抑卮』)。

『域外小説集』の第一冊は一九〇九年二月に出版され、つづいて第二冊が六月に刷り上がったが、そのとき魯迅はもう、杭州の兩級師範の教師になって、帰国する準備をしていた。このときの序文はきわめて気負った文章であって、署名はないがもちろん魯迅の手に成ったものとわかるが、のち一九二〇年三月、群益書社から重印したときの周作人名義の序文も、魯迅が書いたものだそうである。その中に最初の経過が書かれていて、周作人も『知堂回想録』の中には抄録しているが、この出版経緯は一般に知られていることゆえここでは省くけれど、『域外小説集』は「新生」運動の継続であって、「五四」以後の新文学運動への重要な基礎となったという周作人の言はその通りであり、いわゆる東欧の弱小民族文学の方向がまた、中国新文学運動にことに重要な役割を演じていることも勿論であろう(『知堂回想録』『弱小民族文学』)。

弱小民族の中でも、周作人はとくにポーランドとハンガリーの亡国の民に同情し、『域外小説集』の中でも三篇(楽人揚珂、天使、燈台守)を訳しているが、おそらく魯迅が帰国して後であろう、シエンキヴィッチの『炭画』を訳している。これはしかし民国にな

ってから、商務印書館や中華書局にもちこんでも晦渋だとの理由でことわられていて、のちに人民文学出版社の『頭克微支小説集』に入れたものは、口語で改訳したものである。『炭画』のあとにハンガリーのヨークイ・モールの『黄蔷薇』を訳している。これまた一九一〇年訳の旧稿を、一九二〇年になって商務印書館から出版して、これが最後の文言訳となる(『知堂回想録』『炭画与黄蔷薇』)。

周作人が日本の「狂言」や「滑稽本」に目をつけたことは前にちよっと触れたが、魯迅去ってからの一年ほどの間に「俳諧」に興味をもっている。それは幽玄閑寂の禅味、優美艶麗な画意という境地から、正岡子規の写生の提唱にまで到達していったのだった。洋画の写生の手法を文章に応用したというこの写生素というものが、案外周作人のその後の文章に影響した、あるいは彼のもっていたものを引き出したともいえるかと思う。これを通して長塚節、高浜虚子、そして坂本四方太らを知った。ことに民友社出版の四方太の『夢の如し』を、三田を散歩した折、ある小さい書店で三十銭で買い、愛読したという。その時訳出した『夢一般』は、単行本にならないうちに散佚してしまったと書いているが、一九四四年に「芸文」雑誌に連載したという『如夢録』は改訳したものか、実物を見ていないので疑問ののころである(『知堂回想録』『俳諧』)。

周作人が日本で最後に住んだのは、麻布の森元町であった。転々とはしたが、本郷区のいわゆる「山手」にばかり住んでいたのが、麻布へ移って、「喬木を出て幽谷に移ったとまではいえぬかも知れ

ぬが、ともかくすっかり環境が変わった」といっている。ここに住んですっかり下町のよさを知り、いわゆる下町情緒の中にずっぼりと漬かっていったと思う（『知堂回想録』『赤羽橋辺』）。

「私が日本へ留学したのは明治の末年で、それゆえ知っていること、喜びを感じたことも、やはり明治時代の日本のことだけである」（『留学的回憶』）といっているが、一度も帰国せずに六年間住んだ日本は、彼が到る処で口にする第二の故郷であり、その思い出を綴れば、それは「悲しき玩具」になるのであった。この六年間で焼きついた日本の印象はそのまま彼の苦雨斎で、縦横に日本文化を語る文章に開花していったのである。そしてその書架には、明治四〇年に東京市編纂で裳華房から出版された『東京案内』がきちんと載っていたのである。

* * *

帰国してじきに辛亥革命を迎え、紹興を中心に地方の教育界に雌伏、というより革命の傍観者として過ごしたが、一九一七年三月、北京大学長蔡元培の招きで、単身北京へ出て、また魯迅とともに宣武門外の紹興会馆に住んだ。新文化運動の潮流の中で、彼も恰好な活躍の場に引き出されて、「五四」以前の新文学運動の旗手は、この周兄弟二人だけといっても過言ではなからう。その活躍の場が「新青年」であった。「新青年」が思想革命を唱え出してからす

周作人・小河・新村（飯塚）

にまる二年を経過していたが、胡適、陳独秀の文学革命の狼火からちょうど一年目、一九一八年のはじめから、周作人もめざましい活躍を見せはじめたのである。いま細々した詩や雑文などを除いてその一端を示すと、「新青年」所載の周作人の業績は次の通りである。

4—1	陀思妥夫斯奇之小説	「ドストエフスキーの小説」、英の W. B. Triles, 「北美評論」七二七号より訳
2	古詩今釈	ギリシヤ古詩 Theokritos の牧歌の口語訳
3	童子 Lin 之奇蹟	Sologub 原著。
4	皇帝之公園	Kuprin 原著。
⑤	貞操論	与謝野晶子「人及び女として」の中の一編、武者小路実篤の「ある青年の夢」についての評論
〃	讀武者小路君所作一個青年的夢	一九一七年四月十九日、北京大学文科研究所小説研究会での講演
5—1	日本近三十年小説之発達	Strindberg の訳二篇。
2	不自然陶汰	
〃	改革	
3	揚奴拉媼復仇的故事	ギリシヤの Ephralotis の訳二篇。
〃	揚尼思老爹和他驢子的故事	ポーランドの H. Seinkiewicz 原著。
4	會長	L. Tolstoi 原著。
5	空大鼓	人道主義文学を唱えた論文。
6	人的文学	江馬修の「小さい一人」の訳。
〃	小小的一個人	デンマークの H. C. Andersen の「チャ売りの少女」の訳。
6—1	賣火柴の女兒	Sologub 原著。
〃	鉄圈	自作長詩。
2	小河	

7	1	齒痛
6	6	沙漠間的三個夢
5	3	遊日本雜感
4	2	新村的精神
3	1	摩訶末的家族
2	1	誘惑
1	1	黃昏
	5	晚間的來客
	2	瑪加兒的夢
	3	雜譯詩二十三首
	3	被幸福忘却的人們
	4	兒童的文学
	4	深夜的喇叭
	5	文学上の俄国与中国
	5	少年的悲哀
	6	小説三篇
	9	④ 雜譯日本詩三十首
	5	病中の詩
	5	山居雜詩
	5	顛狗病

		可愛的人	A. P. Chehov 原著。
		日本の新村	「新しき村」の紹介。
		沙漠間的三個夢	南アフリカの O. Scheriner 原著。
		遊日本雜感	日本旅行記。
		新村的精神	L. Andrejev 原著。
		摩訶末的家族	一九一九年十一月八日、天津學術講演會所講。
		誘惑	ロシアの V. Dantsenko 原著。
		黃昏	ポーランドの Stefan Zeromski の訳二篇。
		晚間的來客	Kuprin 原著。
		瑪加兒的夢	Korolenko の「マカールの夢」の訳。
		雜譯詩二十三首	ポーランド、イギリス、アメリカ、チェコスロヴァキア、ロシア、インドなどの詩の訳。
		被幸福忘却的人們	David Pinski のユダヤ諷劇。
		兒童的文学	一九二〇年十月二十六日、北京孔徳学校での講演。
		深夜的喇叭	千家元麿の小説訳。
		文学上の俄国与中国	ロシアと中国の文学比較。
		少年的悲哀	国木田独歩の「少年の悲哀」の訳。
		小説三篇	ポーランド二篇、アルメニア一篇の訳。
		④ 雜譯日本詩三十首	日本の詩、十三人、三十首の訳。
		病中の詩	一九二〇—二二病臥静養時の詩。
		山居雜詩	スペインの Blasco Ibanez 原著。
		顛狗病	

この中で〇印を打ったのが日本関係だが、最初に翻訳したのが、与謝野晶子の『人及び女として』（一九一六、四）の一篇「貞操は道徳以上に尊貴である」である。中国では「貞操問題」は時期尚早で、その前にまだ男女の問題を解決せねばならぬが、この日本の一流の女流批評家の卓見は、当時の女性問題を考える上に、大いに参考になる、と序文で書いている。「新青年」が三巻まで「女子問題」の欄を設けたり、「イブセン専号」を出したり、また魯迅が「娜拉走后怎樣」（一九三三）を講演したり、超えて茅盾が『虹』（一九二九年）の中で、ヒロイン梅行素にイブセンの『人形の家』と与謝野晶子の『貞操論』を読ませているのを見ても、文学革命期を通して、女性解放の問題が一つの流行であったことがうかがえようが、その中でこの『貞操論』の翻訳も、当時の時流に乗った仕事の一つとみてよからう。

同じ号にまた周作人の『讀武者小路君所作一個青年的夢』が載り、これも注意すべきものと思うが、次の「新村」の部で後述する。もう一つこの号に、魯迅の『狂人日記』が載った。こうなるとこの「新青年」四巻五号は極めて重大な号といわざるをえない。

日本の小説に関しては『日本近三十年小説之發達』で、まず周作人の日本近代文学への知識の程度をうかがえるはずであるが、この北京大学での學術講演で、彼が帰国後数年にわたって、日本の小説研究を怠っていなかったことが証明される。きわめて「粗浅」なもので Index にすぎぬと謙遜しているが、なかなか要領を得た紹介

になっている。当時の中国小説界はちょうど明治の十七八年ごろに相当しているから、中国でも一部の『小説神髓』が出なければならぬ、と結んでいるけれど、周作人にとっては、その『小説神髓』こそ『人的文学』ではなかったかと思う。

魯迅が帰国してしまって、周作人がひとり残された時期、つまり一九一〇年に、ちょうど日本では新理想主義文学が起こっている。

周作人帰国後も、「白樺」にはずっと関心をもちつづけていたのではないか。『人的文学』の中には白樺派の話は一つも具体的には出てこないで、大体は西欧の人間発見と、中国古典の非人間性を強調するのだが、真に「人」というものの理想生活は、

「まず人類相互の関係を改善することである。お互いはすべて人類であるが、それぞれは人類の中の一人なのであるから、それゆえ自分も利し、他人も利す、他人を利することがすなわち自分を利する生活を営まなければならない。第一に、物質生活の面では、おのおのが能力のかぎりを尽くして、人の生活に必要なものを取ってこなくてはいならない。換言すれば、各人が精神および筋肉の労働をもって、適当な衣食住と医薬に換え、健康な生活を保ちうるようにすることである」(『人的文学』)という。これはそのまま「新しき村」の精神ではなからうか。武者小路の「新しき村」はその実現は一九一八年十一月ながら、その白樺派式人道主義はそれ以前から語られてきているから、その精神にすでに周作人が賛同していたことにまちがいはなからうと思う。

周作人・小河・新村(飯塚)

またこの号には、一緒に江馬修の「小さい一人」を『寂しき路』の中から訳載している。日本の小説を、日本語からじかに訳した、これが最初になる。江馬修はのちに日本プロレタリア作家同盟に入って活躍したが、そのころは自然主義的人道主義の作家であり、ちょうど一九一七年には長篇『暗礁』が出て、ヒューマニズム作家として文壇の基礎を確立したところであるから、周作人の嗜好にかなった作品であったのだろう。

千家元麿の『深夜の喇叭』が訳されていることも納得のゆくことである。大正のはじめに佐藤惣之助らとともに同人誌を出しており、武者小路実篤とも知り合って、白樺派の詩人として活躍し、きわめて善意に充ちたヒューマニズムを流露した作家なら、周作人の好みに合わぬはずがなからう。

『雑訳日本詩三十首』をみても、

千家 元麿	六首
石川 啄木	五首
木下杢太郎	四首
堀口 大学	三首
北原 白秋	二首
生田 春月	二首
奥 栄一	二首
武者小路実篤	一首
与謝野晶子	一首

横井国三郎 一首

野口米次郎 一首

岡田 哲蔵 一首

西村 陽吉 一首

とあって、千家元麿が一番多くとられている。

ただ『少年的悲哀』だけでは、原作が一九〇二年のもので少々旧作に属するが、国木田独歩が出生の秘密をもった作家であり、かなり腕白な少年時代を過ごし、一方では『佳人の奇遇』や『経国美談』というような政治小説を耽読したという、その青春の情熱を反映したこの『少年の悲哀』はまた、当時の若い周作人を刺戟したのかも知れない。

上記の目録をみると、「新青年」の九巻五号以後周作人は書いていないが、文学研究会の仕事はあったにしろ、一九二一年の李大釗、陳独秀と胡適とのギャップで同人が分裂、季刊となって左翼化した雑誌から周作人ははつきり遠去かっと思われる。したがってここでは四巻一号から九巻五号までということになるが、その中で重要と思われるものに波線を施したけれど、『人的文学』はともかく十分定評のあるところ、しかし『小河』にも波線をつけたのは、実はここで「新村」に傾倒する重要な詩ではないか、と考えられたからである。

小 河

一条小河、穏々の向前流動。

經過的地方、兩面全是烏黒の土、生滿了紅の花、碧綠的葉、黄色的果實。

一個農夫背了鋤來、在小河中間築起一道堰。

下流乾了、下流的水被堰攔着、下來不得、

不得前進、又不能退回、水只在堰前亂轉。

水要保他的生命、總須流動、便只在堰前亂轉。

堰下的土、逐漸淘去、成了深潭。

水也不怨這堰——便只是想流動、

想同從前一樣、穩々の向前流動。

一日農夫又來、土堰外築起一道石堰。

土堰坍了、水衝着堅固的石堰、還是亂轉。

堰外田裏的稻、聽着水聲、皺着眉說道：

「我是一株稻、是一株可憐的小草、我喜歡水來潤澤我、

却怕他在我身上流過。

小河的水是我的好朋友、

他曾經穩々の流過我的面前、

小 川

ひとすじの小川、静かに流れゆく。

ゆくところ、兩岸すべてまっ黒な土、紅い花、緑の葉、黄色い果実、生い茂る。

農夫が鋤をかついで現われて、小川の中に堰をつくった。

下流は涸れ、水は堰きとめられて流れ下れず、

進めず、もどれず、水はただ、堰の前でぐるぐる廻る。

水がその生命を保つには、流れなければならぬのに、堰の前でただぐるぐる廻っている。

堰の下の土はさらわれ、深い淵となった。

水は堰を怨まずに——ただいぢぢに流れようとする。

以前と同様に、静かに流れていこうとする。

ある日農夫がやってきて、堰の外側にまた石垣をつくった。

土の堰は崩れたが、水は堅い石垣にぶつかってたおぐるぐると廻るだけ。

堰の外の田んぼの稻が、水音をきき、眉をしかめてこういった。

「わたしは一株の稻、あわれな草、水がわたしを潤おすのは嬉しいが、

水がわたしのからだの上を流れるのは怖い。

小川の水はわたしのよき友、

水はかつて静かにわたしの眼前を流れ

我對他點頭，他向我微笑。

我願他能夠放出了石堰，

仍然穩穩的流着，

向我們微笑，

曲々折々の儘量向前流着，

經過的兩面地方，都變成一片錦綉。

他本是我的好朋友，

只怕他如今不認識我了，

他在地裏的呻吟，

聽去雖然微細，却又如何可怕！

這不像我朋友平日的聲音，

被微風攪着走上沙灘來時，

快活的聲音。

我只怕他這回出來的時候，

不認識從前的朋友了，——

便在我身上大踏步過去。

我所以正在這裏憂慮。」

田邊的桑樹，也搖頭說，

「我長的高，能望見那小河，——

他是我的好朋友，

他送清水給我喝，

周作人·小河·新村(飯塚)

わたしが水にうなずくと、水はわたしにほほえんだ。

わたしは、水が石垣を出て、

いつものように静かに流れ、

われわれに向かつてほほえみ、

まがりくねってひたすらに流れゆき、

流れに沿う兩岸が、錦に変わるのを願う。

水はもとよりわたしのよき友、

だの水はいま、わたしを忘れてしま

つたのではないか、

水は地にもぐって呻吟し、

耳をすませばかすかながら、それはな

んと恐ろしい声！

これはわたしの友の、いつもの声では

ない。

微風にのって、砂のみぎわにひた寄せ

る。

あの快活な声ではない。

水がこんど流れ出してきたら、

以前の友も覚えていないのではないか。

わたしのからだの上を大腿で踏み越え

ていくだろう。

わたしはいま、それを心配しているの

です。

田んぼのわきの桑の樹が、頭をふつ

てこういつた

「わたしは背が高いから、その小川

がよよく見える、——

それはわたしのよき友、

清らかな水をわたしに飲ませ、

使我能生肥緑的葉，紫紅的桑葢。

他從前清澈的顏色，

現成變了青黑，

又是終年掙扎，臉上添出許多痙攣的

皺紋。

他只向下鑽，早沒有工夫對了我的點

頭微笑。

堰下的潭，深過了我的根了。

我生在小河旁邊，

夏天晒不枯我的枝条，

如今只怕我的好朋友，

冬天凍不壞我的根。

将我帶倒在沙灘下，

拌着他帶來的水草。

我可憐我的好朋友，

但實在也為我自己着急。」

田裏的草和蝦蟆，聽了兩個話，

也都歎氣，各有他們自己的心事。

。 * *

水只在堰前轉轉，

堅固的石堰，還是一毫不搖動。

築堰的人，不知道那裏去了。

つややかな緑の葉と、紅紫の桑の実を

つけさせた。

以前のあの清く澄んだ色が、

いまは青黒く變つてしまつて、

それにいつもがき苦しみに、顔に痙攣

の皺。

それはただ下へ下へともぐりこむだ

け、わたしに向かつてうなずき、ほ

ほえむ余裕もない。

堰の下の淵は、わたしの根よりも深く

なつた。

わたしは小川のほとりに生えて、

夏の日照りにも、わたしの枝は枯れな

いが。

いまやわたしのよき友がおそろしい、

冬が来たら、わたしの根は凍つてしま

うのではないか。

わたしを砂のみぎわにおし倒し、

流してきた水草といっしょにされるの

ではないか。

わたしはわたしのよき友をいとおしむ

のだが、

現実にわたし自身のために、気が氣で

ないのだ。」

田んぼの中の草とガマが、二人の話

を耳にして、

いづれも歎息ついた、それぞれに彼ら

自身の不安があつたのだ。

これは六卷二号（一九一九、二、一五発行）に載っているが、その年の一月二十四日に書いた新詩である。当時はちょうど白話詩の試作運動の盛なころで、沈尹默、劉復、俞平伯らとともに周作人もこの面で活躍していたのだが、このような長い新詩を書いたのは始めてであった。そしてこの『小河』と題する詩が、その年の七月日本へゆき、日向の「新しき村」を訪ねたことと連帯関係がありそうである。それ故『小河と新村』という文章を書いたと前置きして、『知堂回想録』の中のかなりなスペースをさき、この『小河』の詩も再録しているのである。

その後一九四四年九月に『苦茶庵打油詩』を発表しているが、これは事変後に書いた旧詩二十四首である（『立春以前』に収む）。そしてその後記の中でも『小河』に言及している。その後記の内容は彼の作った「ざれ詩」の自己弁護だが、詩としてはきわめて拙劣であるけれど、その中には「憂」と「懼」がひそんでいて、孔子のいうように「仁者は憂えず、勇者は懼れず」というわけにはいかず、『詩経』『王風』の中の「黍離」などのように哀傷を帯び、その憂懼の分子が『小河』に出ており、むかしのものは事後の哀傷だが、『小河』こそ将来への憂慮である、といい、さらにつづけて、

「私は中国も東南、水郷の人民だから、水に対しては非常に好意をもってゐるが、しかし水の恐ろしさも十分知っている、『小河』の題材はつまりそこから出た」

それから『荀子』の言葉を引いて、「民は水なり、水はよく舟を

載するも、またよく舟をくつがえす」と述べている。

つまり『小河』からこのかた二十有余年、つまりらぬ詩作をつづけてきたが、その中には寓意的に中国の思想問題が單められていたとして、この『小河』の憂懼を、当時の日本の「新村」に托したことをなつかしく回想しながら、この後記は終わっているのだが、この「打油詩」二十四首の中で、第十五首目の、

野老生涯是種園 閑銜煙管立黄昏

豆花未落瓜生蔓 悵望山南大水雲

が『小河』の情調に近いものとして紹介される。「大水雲」とは「夏、南方で赤い雲がひろがると水患があるといわれ、これを大水雲と称した」と自注している。この詩は一九四二年の作で、それから数年して北京は解放された。もとより大革命の到来はきわめて自然順利、俗語に「瓜熟れて蒂落つ」という。つまり時期がくれば事は自然に成就するもの。それなら憂懼などというものは空しいものだけけれど、これは知識階級の通弊なのであろう。また昔と今では情勢もちがって、むかしは憂懼が事実となって災難がやってきたものだが、いまだは何とか救われる方法もあり、ちょうど手術をする病気が治って身が軽くなるようなものである、と語る。いかにも周作人らしい見方で、北京解放に触れている個所である。

一九一七年单身北京へ出たことは前に書いたが、一九一九年四月に妻子も呼び寄せる決心をして休暇をとって紹興に帰り、ついでに日本に里帰りさせて、久々にゆっくりした気持ちで上野公園へ遊び

にいこうとした折も折、「五四」の事件のニュースを耳にしたのであった。周作人は急遽北京へもどったが、すでに五月十八日になっていた。その後「六三」の時期を過ぎていくらか落ちついた七月の二日、再び妻子を迎えに、塘沽から船で、六日の午前中に門司港に着き、その足で日向の「新しき村」を訪問したのであった。

* * *

「この『新村』とはいかなるものか。もとよりこれは武者小路実篤が発起した一種の理想主義的社会運動である。彼は白樺派の一人で、一九一〇年四月から開始され、機関誌を発行し、人生の文学を提唱した。当時の日本文学は、自然主義がすでに充分発達し、その種の主張は人生に対して解決を求めず、一種の倦怠と悲観の空気の発生するを免れず、彼らはこの現象に不満であった為、一種の新しい理想に傾いた。一言でいえば人道主義といえよう。彼らはすべてロシアのトルストイ、ドストエフスキーの影響をうけ、武者小路はこの一派の領袖であって、ことにトルストイ晩年の『躬耕』に感佩し、理想から現実に移した、これがいわゆる『新村』であった。彼は最初機関誌で彼らの主張を発表、のち同志の青年がようやく増加したので、組織実行に着手し、一九一八年、日向児湯郡という所に若干の田地を買い、最初の新しき村を建てた。その翌年の七月、私が訪問したのは、この『新村』だったのである」(『知堂回想録』「小

周作人・小河・新村(飯塚)

河与新村)。

もちろん武者小路実篤とはこのときがはじめての対面だったが、文通はもっと以前からあった。

「僕が初めて周作人と文通したのは、もう三十年程前の話だ。僕が二十七八の時の話だ。白樺の臨時増刊のロダン号の残本が何部かあったのを、売ることにして白樺でそのことを発表した時、支那から一人の人がロダン号を注文して来た。それが周作人だった。僕はその手紙を見た時、支那から注文して来たので、嬉しく思ひ、他の注文して来た人は忘れたが、周作人からの注文は忘れなかった。それから二三度、文通したと思ふ。

もっと文通したかと思ふ。半年に一遍、一年に通の時もあったかと思ふ。翻訳のことなどもあったと思ふ。志賀のものを訳したいと言ふ話もあったかと思ふ。

当時僕はまだ若かったから今のやうに筆不精ではなかった。手紙がくればすぐ返辞を出した。しかし本当に親しくなり、逢ふやうになつたのは、僕が新しき村の仕事をはじめてからだ。

周作人は僕の新しき村の仕事に共鳴してくれ、新しき村の会員にもなつてくれ、北京に支部をおくことも承知してくれ、村が宮崎県に出来た時、わざわざ日向の山のなかの村まで来てくれた」(武者小路実篤『周作人と私』昭和十六年四月)。

白樺創刊が一九一〇年で、岸田劉生とか有島生馬とかも同人に加わり、初期には美術関係の紹介が盛だった。周作人が「支那」から

ロダン号を註文したというのは、一九一一年に帰国してじきのことであつたらう。留日時代「白樺」創刊は十分関心事であつたらうし、武者小路の作品も読んでいたらう。そしてその中でも『ある青年の夢』が、周作人ばかりでなく、魯迅の注意も惹いた。トルストイズムもさることながら、『ある青年の夢』の書き出しの部分が、いかにも魯迅好みのようにも考えられる。

まず周作人が「新青年」に『讀武者小路君所作一個青年的夢』を書いて、桜井忠温の『肉弾』などを喜ぶ好戦国日本に出たこの反戦作品を称讚した。しかしこの時は「武者小路君」と「君」づけで呼んでいるが、まだ面識以前のことであり、もちろん周作人が武者小路実篤より四カ月ほど年長だと計算したわけもなからう。同等の文学者のつもりであつたと思う。超えて一九二〇年一月一日発行の「新青年」(七卷二号)に魯迅訳の『一個青年的夢』が載るが、前に引用した武者小路の「翻訳のことなど……」のくだりはこのことを指し、すでに面識をもつた周作人の仲介で、武者小路から魯迅に宛てた「支那の未知の友へ」が、周作人の中国訳で、魯迅訳の巻頭に載ることになったのである。

年代的にみてもわかるように「新青年」六卷三号(一九一九、三、一五発行)に載つた『日本の新村』は文献に拠る紹介である。おそらく『新しき村の生活』(新潮社版、大正七年八月)に拠つたものであつて、ほかに雑誌「新しき村」をも含めて、三十数カ所にわたつて引用紹介している。

これだけの基礎知識をもてば実地に見学したくなるので、前記のように妻子の日本への里帰りに便乗して「新村」訪問の下心はあつたらうが、「五四」の事件に遭つて予定は狂つたものの、二度目に単身門司に着いた足で日向行を決行した気持ちは十分うなずかれる。この日向行の詳しい記録が、「新潮」に載せた「訪日本新村記」である。武者小路は「一晚か二晩」と書いているが、実は四日間本部へ泊り、いくつか支部をまわつて、都合十日を費している。

一九一九年の七月二日、北京から朝の汽車で出発、午後塘沽へ着いて、日本郵船の船で六時出帆、霧のため朝鮮海峡に一日停り、六日早朝に門司に着くと、さっそく鹿児島本線で八代から、人吉を経て、吉松に着く。ここで駅前の中旅館に一泊して、七日の九時半出発、宮崎県南部を迂回して海岸線に出て、午後二時に福島町駅に着く。ここから馬車で高鍋へ、高鍋へ着くと雨だつた。馬車を乗換えるため雨宿りしていたとき、

「北京からみえた周さんですか」

と労働服の青年に呼びかけられる。これが新しき村から迎えにくてくれた横井国三郎と斎藤徳三郎であつた。雨の中を迎えてくれたこの二人のことは、周作人の印象に深く刻みつけられた。前出『小河与新村』の最後の部分にも彼らのことと、そのときの興奮した気持が再録されている。

横井、斎藤の両君が馬車を僱つてくれて、高城たかじょうに向かつて出発すると、じきに行き会つたのが、「武者小路実篤先生と松本長十郎、

福永友治の両君で高城まで同乗した」とあって、ここでは武者小路に「先生」がついているけれど、この個所はかえって単なる記録にとどまり、はじめて武者小路と会った感激など一行も書いていない。これもまた周作人らしさの現われかも知れない。

高城の深水旅館で少し休憩してから、石河内村まで三里ほどの山道を、各自提灯をもって六時半に出発、また雨が落ちて麦藁帽子から雨が滴り、洋服もすっかり湿った。八時ごろ山頂に達したときはもうまっ暗だったが、路傍の店で休み、サイダーと水でのどをうるおし、蠟燭に火を点じてまた歩き出した。しかし風雨のため提灯の骨と紙が分離してしまい、両手でおさえて歩かねばならなかった。そんなことで一行は散りぢりになり、互いに呼び合う。その声をききつけて、山麓の「村」の連中が暗の中を迎えにきてくれた。武者小路房子夫人、川島伝吉らであった。こうして石河内へ着いたのが九時半、さっそく武者小路の家の二階で湿った衣服を着換え、「村」からやってきた人々を加えて、周作人が北京から持参した乾葡萄など頬張りながら、よもやまの話に花が咲く。

八日の午後になって、武者小路とともに、小丸川のほとりの「新村」に出かける。そこは城趾だそうで、土地の者は城と呼んで、川へ半島のように突出していた。「新村」の風景、会員の村人のことが丹念に描かれ、家畜の匹数や農作物についても詳しく記録している。翌九日は村での農耕に参加して、その状況をつぶさに体験させてもらって、

「無論何処、国家与国家、縦使交情不好、人与人的交情、仍然可以好的、我們当為『人』的緣故、互相扶助而作事」(「新村」第二年七月号)

と、武者小路の意のあるところに十分感佩する。お互いの会話の中で「敝国」とか「貴邦」とかいう応酬はなかったが、客として優待されているのは一種の差別かもしれないけれど、田間で一緒に仕事に従事したときには、まるで故郷の園中にもいるような気がしたし、村の人たちも彼を村人として何の区別もしていなかったと、周作人は「汝即我」の境地を噛みしめたのだった。

十日に村を出る予定が、疲労と環境のよさとで一日延びた。去るに臨んで武者小路は記念の書を、周作人に所望した。周作人は、

「子曰、仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣」

と書き、武者小路は、

「子曰、内省不疚、夫何憂何懼」

と書いた。これは武者小路が当時愛誦していた文句だった。『論語』が手許にあり、孔子と耶蘇を研究していた時である。「耶蘇」はその八月から雑誌「新しき村」に連載されている。

十一日も雨であったが、午前八時に松本和郎君と出発、十一時に高城に着いたが、水勢が増して橋が折れ、交通が杜絶えたとのことで深水旅館に一泊、翌十二日になってやっと馬車を僱って、松本君、佐後屋君、武者小路、杉本千枝子が同乗して、高鍋に着いたのが十時半。そこで暫く休憩した折、街をぶらついて、その本屋で周作

人は雑誌「我等」の七月号を購い、車中で読了して感心している。これには武者小路の一幕物『新浦島の夢』が載っていたのだが、この雑誌は当時は大山郁夫編集で、ブルジョア・デモクラシーの傾向が濃厚なもの、周作人が当時日本への傾倒はつまり、不知不識大正デモクラシーへの接近とも見られはしまいか。

十二時に武者小路たちと別れ、馬車を換えて午後二時福島町駅に着く。四時に汽車が出て、九時吉松で乗換え、夜中の三時、大牟田で佐後屋君と別れた。

十三日朝、下関から急行で、夜の十一時に大阪着、茶屋半次郎が迎えにきて、彼の家へ泊る。十四日の午後、茶屋同伴で京都へ行き、内藤君の案内で丸山公園に遊ぶ。東京の永見君がここまで迎えにきてくれて、十二時半京都を発ち、十五日午前七時浜松に着いて、竹村啓介の家で会員に会い、その夜十時に出発、十六日朝六時半に東京駅、長島豊太郎、佐々木秀光、今田謹吾たちが出迎える。周作人はしばらく巢鴨の宿で休んで、夕方六時に神田大和町の新しき村東京支部で会談、九時に解散した。

この十日間にわたる新しき村の本部支部の歴訪の詳細を、七月三十日にその巢鴨の宿で書きとめたのが、この『訪日本新村記』である。これをもて新しき村の会員たちの歓迎ぶりもさることながら、いかに周作人が国の差別など忘れて興奮のままに過ぎたかがわかると思う。

六巻六号の『遊日本雑感』は、「新村」を訪問したことに触れた

だけだが、七巻二号の『新村的的精神』は、一九一九年十一月八日に天津学術講演会で、口頭による「新村」紹介である。その最後に、中国においてもこの「新村」に似た組織のあるのを三つ挙げて比較している。南京の啓新農場有限公司、北京の平民新組織、龍華の新村である。後二者はまだ計画中であつたり、緒についたばかりであつたが、前者ははっきり賃銀平等、所得平等を目ざして、村人すべて当時一律二〇〇〇円の株をもつ仕組みで、日本の「新しき村」のゆき方とは程遠いことを指摘している。

しかし周作人の場合はそこまですが限界であつて、武者小路のよりにたとえ失敗しても、という意気込みで「新村」運動を實行できるタイプではなかつたらう。むしろ彼自身の内部にユートピアをもつて、寓意を含んだ文章をものすることが、彼の身上しんじょうであること、のちに物語っている。

「そもそも私が武者先生に初めてお会ひしたのは民国八年（大正八年）の秋だったから、もう二十四年も前の事である。武者先生（常々皆がかう呼ぶので今では通称になる）はその頃日向で新しき村を経営されて居たので、私はその山に囲まれた村へ行き、先生の家を訪ねて四日程泊り帰途、大阪、京都、浜松、東京等の新しき村支部を訪ねて前後十日間を費ひやした。二回目は民国二十三年（昭和九年）で私が夏期の休暇を利用し東京へ二ヶ月ほど滞在した時である。そこで会見し一緒に新しき村支部について話し合った。又三回目は民国三十年（昭和十六年）の春で東亜文化協議会参与の為東京へ赴き、日

本筆会の諸名家達に星ヶ岡茶寮へ招待された時である。丁度武者先生も此の中の一人だったので会見出来たわけである。それから今年の四月に先生が南京の中日文化協会へ来られた時、北京へも来られたので会ふ機会を得た、これは丁度四回目の会見である。この時私は用事があり南京蘇州へ行って居たので、私が北京へ帰った時は、先生も、もうあと一日の滞在で北京を離れようとするところだった。私達はその一日を午前は北京飯店の庸報座談会の席上で、午後は私の家で非常にあわただしい幾分間の交談を得ただけで終った。

数えてみると、第一回目は四日程会見出来たのを除くと、私と先生との交談の機会もそんなに多いとは云へないけれど、お互ひの關係は悠久であり従って二人の友誼も古くからと云ふことが出来る。武者先生は時々自分の文章の中に私の事を書き私の立場を明かにする。お互ひに識り会った頃はまだ有名でなかったからあの頃は面白かったと云ってゐるが、然し本当はこれは謙遜からの話であつて、

二十四五年來「白樺」は日本文学史において既に有名なものであり、先生はその領袖に當つてゐたのである。それに反し、私が稚拙な文章を書き始めたのはこれから五六年後でありながら今もって物足り無いものばかりである。けれども今日まで私達の交際は常に勢利の気持は少しも無く続けられて来た」

これは周作人の書いた「武者先生和私」の一部分で、昭和十八年「新文化」十二月号に且住訳として載つたものそのままの引用である。原文はいま『甘口辛口』に収められているが、この引用をみて

周作人・小河・新村（飯塚）

も、武者小路実篤との友情が並々ならぬものを感じとることができるのであらう。

この引用のすぐあとにつづく文章は「日華事変」に絡むことになり、この小文の範囲を超えるし、所定の枚数も尽きているので、このへんで一応筆を擱こうと思う。『知堂回想録』（一九七一年一月、香港版）を下敷きにして、ただ周作人・小河・新村と並べただけで、べつに結論も出ない。気にはなりながらどうも厄介で、周作人を避けて通るといふような傾向もあるらしいが、たしかにそれだけ難解な点もある。しかし中国で『周作人に無産階級思想ありや』（夏羽「文芸報」一九六〇第二期）と攻撃するような単純さでなく、日本でも早くから周作人に取組まれた先輩松枝茂夫あり、最近では幸い木山英雄訳で周作人の『日本文化を語る』（一九七三、五、筑摩書房）が出たし、七四年七月には「文芸展望」に長谷川四郎の「周作人と日本人」が載つた。またそのほかにも、周作人を地道に研究しておられる土がありとも仄聞する。それらが将来周作人研究に大きく発展することを希うものである。

最後にこの小文を読まれる上でも便宜と思ひ、周作人著作目録を載せておくが、既存のもので一番信頼のおけるのは、日本で方紀生編で光風館から出版した、周作人六十誕辰記念の、『周作人先生の事』（昭和十九年）の最後に載つた目録で、松枝茂夫作製のものを周作人自身が増補修正し（一九三七年まで）、そのあとに方紀生が付録

したものだと思うので、それを基礎にして補正、周作人没後に出土のものも加えて草稿をつくり、一応松枝氏の検閲はうけたものの、資料に欠けて実物を見られないものも多々ある。あくまで稿であって、大方のご叱正を請う次第である。

周作人著作目録 稿

一九〇五	狭女奴	「アリババと四十人の盗賊」の文言訳、『女子世界』掲載(一九〇四)筆名萍雲女士、小説林発行。	一九二五	現代日本小説集	日本当代作家十五人の短篇三〇篇、魯迅と共訳、商務印書館。
	玉虫縁	「黄金虫」の文言訳、筆名碧羅女士、「山羊図」と題し「女子世界」へ送ったが改題されて出版。	一九二七	陀螺	各国の詩二八〇篇の訳(ギリシヤ三四、日本一七六、他七〇)、新潮社↓北新書局
一九〇六	孤児記	前半は創作、後半は「Claude Guenz」の訳、小説林出版。	一九二六	雨天的書	散文五二篇、新潮社↓北新書局(一九三三)。
一九〇七	紅星佚史	英の「シグガードとアンドルー・ラング共著」[The World's Desire]の訳、筆名周道、商務印書館。	一九二七	冥土旅行	ルキアノス、フェーブル、スイフト、兼好の訳、北新書局。
	勁草	アレクセイ・コンスタンチノビッチ・トルストイ「白銀公爵」の訳、未刊、遺失。	一九二六	狂言十番	一〇篇、日本古代小喜劇集と傍題、北京北新書局。
一九〇八	匈奴奇士録	「ハンガリーのモークイ・モール」[Egy az Isten] (神は一なり)の訳、商務印書館。	一九二七	瑪加爾的夢	コレンコの小説「マカールの夢」の訳、北新書局。
一九〇九	域外小説集	二冊、魯迅と共訳、各国短篇三七篇、自費出版。合本、上海群益書社(一九二〇)。	一九二七	談龍集	文芸に関する随筆四四篇、訳二篇、開明書店。
一九一四	炭画	ポーランドのシェンキヴィッチ「木炭画」の訳、一九〇九年訳了、上海文明書局。	一九二八	談虎集	散文二四篇、北新書局。
一九一八	欧洲文学史	北京大学講義、北京大学叢書の二、商務印書館。	一九二九	兩大鼓	啄木、実篤、武郎、善郎、有る三の作品七篇の訳、開明書店。
一九二〇	黄薔薇	「モークイ・モールの「A Sargos Rzsas」」最後の文言訳、一九一〇年訳了、商務印書館。	一九三〇	永日集	二冊、評論二二〇篇、北新書局。
一九二二	現代小説譯叢	二冊、各国短篇二一篇の口語訳、北京大学出版部。付録として「人的文学」ほか二篇、商務印書館。	一九三一	過去の生命	「点滴」の改訂本、同じく二一篇だが、多少出入あり、付録なし、開明書店。
一九二二	自己的園地	欧洲各国短篇三〇篇、魯迅、周建人と共訳、商務印書館。	一九三二	藝術与生活	散文四〇篇、翻訳五篇を含む、北新書局。
一九二二	自己的園地	文芸論五三篇、晨報社。最初の小品文集。重訂五六篇、北新書局(一九二九)。	一九三二	看雲集	文芸論二一篇、群益書社。
				兒童文学小論	散文四〇篇、翻訳一篇、開明書店。
				兒童劇	章錫琛編注、既出諸書より散文三〇篇収集、開明書店。
				近代散文鈔	論文二一篇、上海兒童書局。
					坪内逍遙三篇、他に米の兒童劇の訳、兒童書局。
					明末清初の小品文集、二冊、北平人文書店。

一九三三	知堂文集	自選散文集、既出諸書より四六篇、他に訳二篇、上海天馬書店。	一九五一	希臘神話	Apollodorusの「ギリシヤ神話」、一九三八年訳了、原稿紛失、この年再訳したが未刊。
	周作人書信	書信のみ一〇〇通ほど収録、上海青光書局。	一九五三	魯迅的故家	筆名周遐壽、上海出版公司。のち人民文学出版社（一九五七）。
	苦茶庵笑話選	明、清の笑話本より選注、他に「徐文長故事」八篇、北新書局。	一九五四	魯迅小説裏的人物	筆名周遐壽、上海出版公司。のち人民文学出版社（一九五七）。
	希臘擬曲	ヘロンダス七篇、テオクリトス五篇の訳、商務印書館。		日本狂言選	「狂言十番」に十四篇増補、人民文学出版社。全訳、人民文学出版社。
一九三四	中国新文学之源流	文学革命の源流を論じたもの、輔仁大学での講演、北平人文書店。	一九五五	伊索寓言	筆名周啓明、北京中国青年出版社。
	夜讀抄	散文三七篇、大部分読書隨筆、北新書局。	一九五七	魯迅的青年時代	「苦茶庵笑話」とほぼ同じ、「徐文長故事」なし、周啓明校訂、人民文学出版社。
	苦雨斎序跋文	題跋のみ五三篇、天馬書店。	一九五八	明清笑話四種	「浮世風呂」前半の訳、筆名周啓明、人民文学出版社。
一九三五	苦茶隨筆	散文四九篇、北新書局。		浮世深堂	「浮世床」全訳、未刊。
一九三六	苦竹雜記	散文四九篇、良友圖書公司。	一九五九	浮世理髮館	散文一五篇、新地出版社。
	風雨談	散文三五篇、北新書局。		過去の工作	香港大公書局。
一九三七	瓜豆集	散文三四篇、付録二、上海宇宙風社。		俄羅斯民間故事	香港大公書局。
一九四〇	乘燭談	隨筆および書評二四篇、北新書局。	一九六〇	枕之草紙	訳了せるも未刊。
一九四一	菜堂語錄	隨感錄五〇篇、天津庸報社。	一九六一	知堂乙西文編	散文一七篇、三育圖書文具公司。
一九四二	菜味集	散文二三篇、北京新民印書館。	一九六二	石川啄木詩歌集	筆名啓明、下立強と共に訳、人民文学出版社。
一九四四	菜堂雜文	散文二七篇、新民印書館。		日本落語選	材料を集めたが、訳成らず終る。
	書房一角	散文一九一篇、新民印書館。	一九六三	古事記	人民文学出版社。
	乘燭後談	散文二四篇、新民印書館。		路吉訶諾斯對話選集	Lukianos 對話集、未刊、最後の訳作。
一九四四	苦口甘口	散文二一篇、上海太平書局。	一九七〇	知堂回想錄	曹聚仁の勧めで一九六〇―六三の間に書かれ『海光文芸』に発表のつもりが停刊、六六年付印されたが曹聚仁の病気で中断、六八年九月『南洋商報』に連載十カ月、その後三育圖書文具公司より出版さる。上下二冊。
一九四五	如夢錄	坂本四方太「夢の如し」の訳、民国三三年二月より芸文雜誌連載、単行本なし。		周作人晚年手札	太平洋圖書公司。
一九四九	希臘女詩人薩波	編訳、三〇〇冊にて絶版、上海出版公司。	一九七二	希臘神話	英の W. H. D. Rouse より重訳、文化生活出版社の「希臘神話故事」と改題。
一九五〇	希臘的神与英雄与人				

周作人・小河・新村（飯塚）